

## 令和元（2019）年度資源評価調査報告書

種名	ウスメバル	対象水域	青森県～新潟県沿岸
都道府県名		担当機関名	日本海区水産研究所

### 1. 調査の概要

青森県～新潟県の各県で、漁業種別漁獲量調査を実施しており、漁獲量の変動等から資源動向を把握している。また、新潟県では漁獲物の体長組成、年齢組成が調査されている。

### 2. 漁業の概要

調査対象水域においては、刺し網および釣り漁業による漁獲が主体となっている。また、県別では青森県の漁獲量が最も多く、同県の太平洋側も含めた漁獲量は、全体の半分以上を占めている。

### 3. 生物学的特性

調査対象水域におけるウスメバルの生物学的知見については、「メバル類の資源生態の解明と管理技術開発」（2001）に記載されており、その概要も含めた詳細については参画各県による報告を参照されたい。

### 4. 資源状態

長期に及ぶ漁獲量の漸減傾向から、資源水準が低位、動向が減少とされた山形県を除き、資源水準は中位～高位にあるとされており、特に青森県および秋田県では2017年以降の漁獲量の増加が顕著である。なお、山形県における近年の漁獲量の減少は、刺し網漁業者の減少によるものと考えられている。

### 5. 資源回復に関するコメント

刺し網の網目制限や小型魚の荷受け制限による小型魚の保護が行われている。一方、秋田県では、釣り漁業による小型魚の漁獲割合が刺し網と比べて高いことが報告されているほか、新潟県では遊漁による釣獲が相当量あると考えられている。小型魚の漁獲は、資源水準の維持・増大に必要となる親魚量の確保および魚価の側面からも望ましくなく、釣り漁業においても、小型魚の漁獲割合を低減する管理方策を講じることが重要である。さらに遊漁による釣獲の実態についても明らかにする必要がある。

#### 【引用文献】

青森県水産試験場・秋田県水産振興センター・山形県水産試験場・新潟県水産海洋研究所・京都府立海洋センター(2001) メバル類の資源生態の解明と管理技術開発. 水産業関係特定研究開発促進事業総括報告書, 101pp.

## 令和元（2019）年度資源評価調査報告書

種名	ウスメバル	対象水域	青森県沿岸
都道府県名	青森県	担当機関名	(地独)青森県産業技術センター 水産総合研究所

### 1. 調査の概要

青森県全域の月別、漁業種類別、銘柄別漁獲量の集計

### 2. 漁業の概要

青森県のウスメバル漁は、周年一本釣りで漁獲される他、4～6月に太平洋側の底建網、6～8月に日本海側の刺網で漁獲される。2019年の漁法別漁獲割合は、一本釣り47%、刺網31%、底建網12%、その他10%であった。

### 3. 生物学的特性

本海域におけるウスメバルの知見については「メバル類の資源生態の解明と管理技術開発」（2001年）に詳しく記載されており、主な生物学的特性は以下のとおりである。

- ・ 寿命：10年以上
- ・ 成熟：3歳以上（主体は4歳以上）、年齢別成熟率は不明
- ・ 産仔期、産仔場：交尾は青森県及び秋田県で12月、山形県及び新潟県で12～1月、産仔は青森県及び秋田県で3～5月、山形県で2～4月、新潟県で2～3月。
- ・ 分布：日本海では石狩湾から対馬海峡まで、太平洋では函館から銚子まで。
- ・ 生態：仔魚期は産出から体長16mm前後まで表層で生活し、稚魚期には流れ藻に随伴し体長35mm前後で底生生活へ移行。1～3歳魚は青森県では水深50～70m付近に、佐渡島では60～80m付近に分布。主な餌生物は仔稚魚期、1歳魚ではかいあし類、2歳魚でかいあし類、ヤムシ類、3歳魚でかいあし類、ヤムシ類、端脚類、オキアミ類、4歳魚以上でオキアミ類。
- ・ 成長（尾叉長）：1歳で8cm、2歳で13cm、3歳で17cm、4歳で21cm、5歳で23cm、6歳で25cm、7歳で26cm（青森県～京都府の平均、雌雄とも同じ）

### 4. 資源状態

青森県全域の漁獲量は、1978年の1,045トンをピークに1988年の197トンまで減少、1995年～2011年に375トン～646トンの範囲で横ばい、その後2014年の185トンまで減少し、2017年に増加に転じ、2019年は490トンであった（図1）。

資源水準については、長期間データを有する漁獲量を判断材料とし、その最高値と最低値との間を3等分し、上から高位、中位、低位とすると、2019年の資源水準は中位であった。

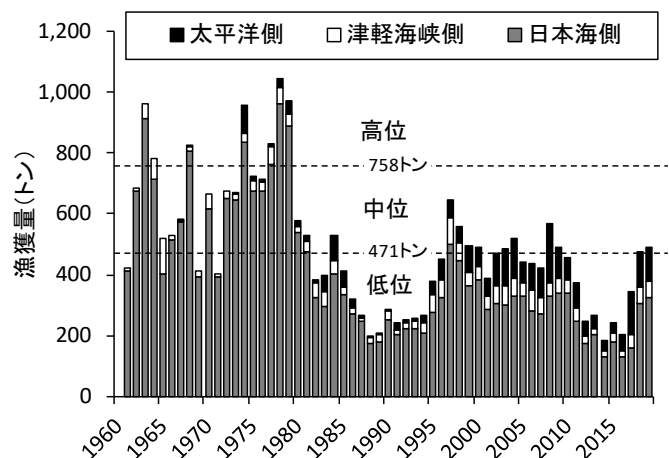


図1 青森県におけるウスメバル漁獲量の推移

資源動向については、コホート解析により推定した資源量の直近5年間の傾きから増加と判断した（図2）。

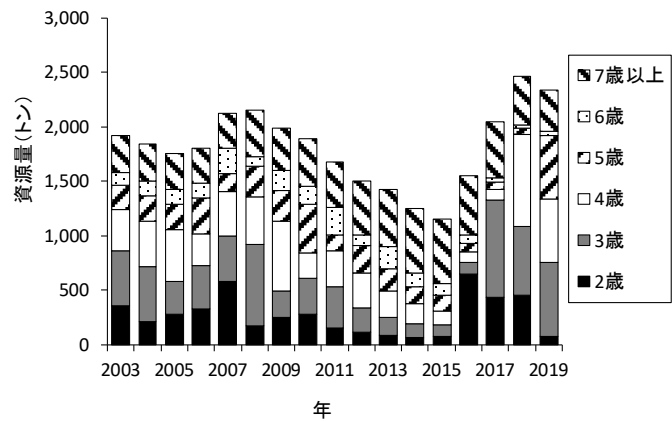


図2 青森県におけるウスメバル資源量の推移

5. 資源回復に関するコメント

青森県：資源回復計画（2007年3月青森県）において、小型魚の荷受け制限、休漁日を定め実施し、2011年以降は青森県資源管理指針で継続実施している。

## 令和元（2019）年度資源評価調査報告書

種名	ウスメバル	対象水域	秋田県沿岸
都道府県名	秋田県	担当機関名	秋田県水産振興センター

### 1. 調査の概要

- ・ 年別月別漁業種類別地区別漁獲量の集計
- ・ 年別 CPUE の集計

### 2. 漁業の概要

2019年の全県漁獲量は153.9トンで前年比16%増（21.7トン増）となった。漁業種類別漁獲割合は、さし網漁業が50%、釣り漁業が48%であり、これらで99%を占めた。月別漁獲割合は2月～7月で合計83%であり、この間の地区別漁業種類別漁獲割合は、主たる部分では県北部地区のさし網漁業及び同地区の釣り漁業があげられ前者が全体の48%（74.6トン）、後者が20%（30.9トン）を占めた。

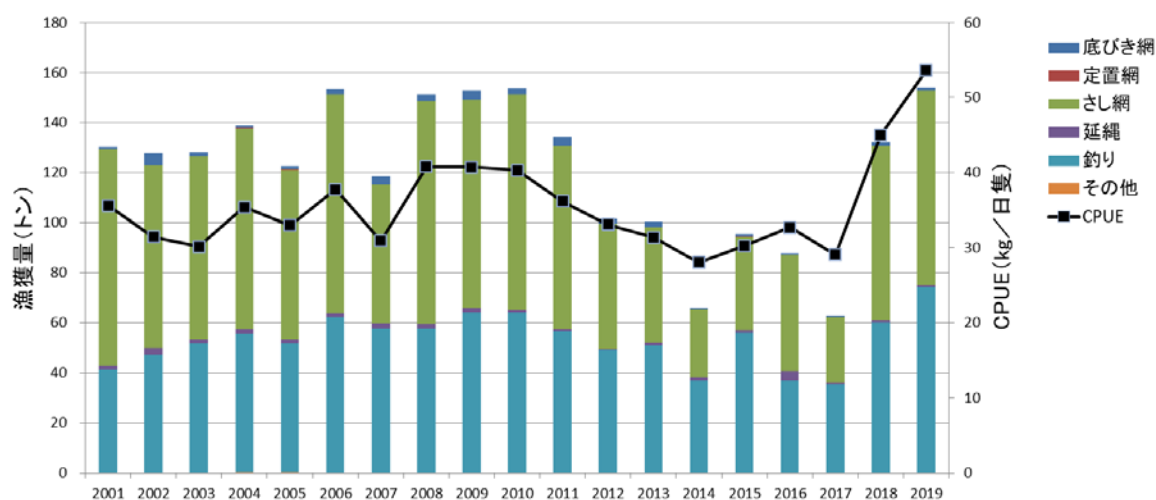
### 3. 生物学的特性

日本海北部海域におけるウスメバルの生態については「メバル類の資源生態の解明と管理技術開発」（2001）に詳しく記載されている。

- ・ 寿命：10年以上、成熟：3歳以上、交尾期：12月 産仔期：3～5月
- ・ 分布：石狩湾～対馬海峡、函館～銚子
- ・ 浮遊期：～BL1.6cm、流れ藻随伴期：～BL3.5cm、底生移行期：BL3.5cm～
- ・ 成長（BL）1歳8cm、以降13cm、17cm、21cm、23cm、25cm

### 4. 資源状態

近年の漁獲量は2010年をピークに減少傾向にあったが2018年は前年の2倍以上の132トンに増加、2019年はさらに前年を上回り2001年以来最高となった。またCPUEも2017年以降急激に上昇、2019年は50kgを超え2001年以来の最高値となった。



### 5. 資源回復に関するコメント

秋田県漁協北部支所管内における銘柄（小未満、小、中、大及び特大以上の5区分）別漁獲重量割合をみると、さし網漁業の小銘柄以下の2015～2019年の過去5年間の平均割合は5.0%（2019年は6.1%）、対して釣り漁業の同平均割合は18.6%（同16.6%）であり、さし網漁業については目合制限（許可の制限又は条件）により、ある程度小型魚の漁獲回避がなされていると考えられた。一方、釣り漁業はさし網漁業のような制限がないため、今後、資源状況が低迷する局面においては小型魚の保護対策等について検討を要する。

## 令和元（2019）年度資源評価調査報告書

種名	ウスマバル	対象水域	山形県沖
都道府県名	山形県	担当機関名	山形県水産試験場

## 1. 調査の概要

漁業種類別に漁獲量を取りまとめ、漁獲変動を把握した。

## 2. 漁業の概要

近年では2009年の漁獲量（51トン）が最も多く、それ以後は減少傾向にある。2019年の漁獲量は12.8トンで、飛島地区を中心に4、5、9月が主漁期のさし網が5.0トン（39%）、一本釣りが4.0トン（31%）、底びき網が1.7トン（13%）、はえなわが2.1トン（16%）となった。

## 3. 生物学的特性

胎生、仔魚産出期；3～4月、分布海域；水深70～200mの岩礁域、寿命；10年以上

## 4. 資源状態

漁獲量は急増（1992、1996、2005）後に漸減する変動がみられ、2009年（51トン）の急増後の漸減は長期にわたり、2019年（12.8トン）は1990年以降の過去最低を更新した。

資源水準は1990～2018年の漁獲量の最大値に近い50トン进行3等分し、33トン及び16.6トンをそれぞれ高位と中位、中位と低位の境界値とし、2019年の資源水準は低位、資源動向は過去5年間の漁獲量の推移により減少と判断した。

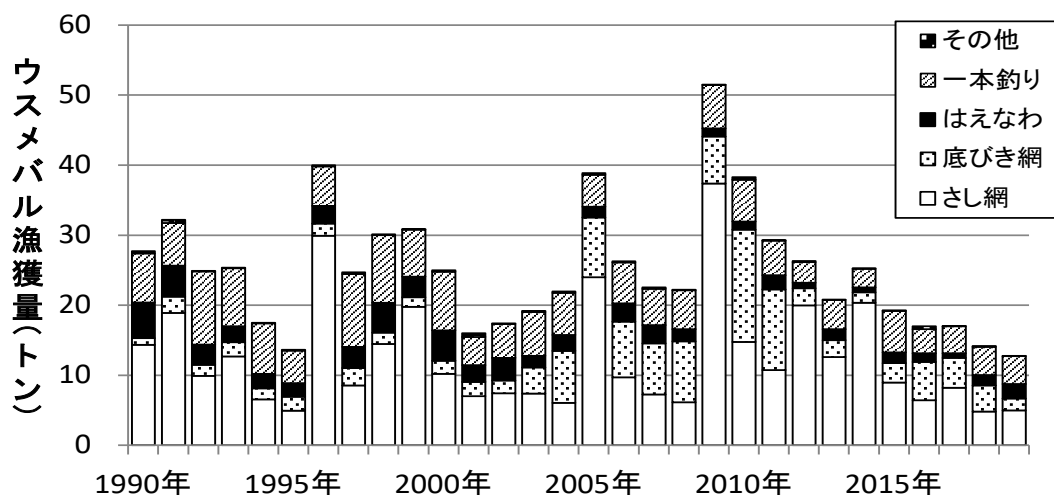


図1 山形県におけるウスマバルの漁業種類別漁獲量の推移

## 5. 資源回復に関するコメント

直近3年（2017～2019年）とその前の3年（2014～2016年）の漁獲量を漁業種類別に比較するとさし網は減少したものの、それ以外の漁業はさほど変わっていない。さし網の漁獲量減少は、漁獲努力量（従事漁業者）減少の影響によるものと考えられた。

## 令和元（2019）年度資源評価調査報告書

種名	ウスメバル	対象水域	新潟県沿岸
道府県名	新潟県	担当機関名	新潟県水産海洋研究所

### 1. 調査の概要

- 市場における漁獲物体長組成の把握及び生物測定調査
- 月別漁業種別漁獲量の集計

### 2. 漁業の概要

2018年の県全体の漁獲量は192トン、2019年の越後側主要4地区の漁獲量及び佐渡市場取扱量の合計は80トン（前年比80%）であった。

漁業種別では刺網が8割近くを占めている。主漁期は2～7月であり、特に3～6月が多い。地区別の漁獲状況は、佐渡が全体の6割、越後側が4割を占めている。

### 3. 生物学的特性

寿命：9年以上

成熟開始年齢：3歳～（主体は4歳～）

産仔期：新潟県では2～3月に稚魚を産仔する。産仔場は不明。

索餌期・索餌場：～35mm＝浮遊・流れ藻随伴、35mm～＝底生生活、

1-2歳＝60-80m深、3歳～＝80-150m深（佐渡島沿岸）

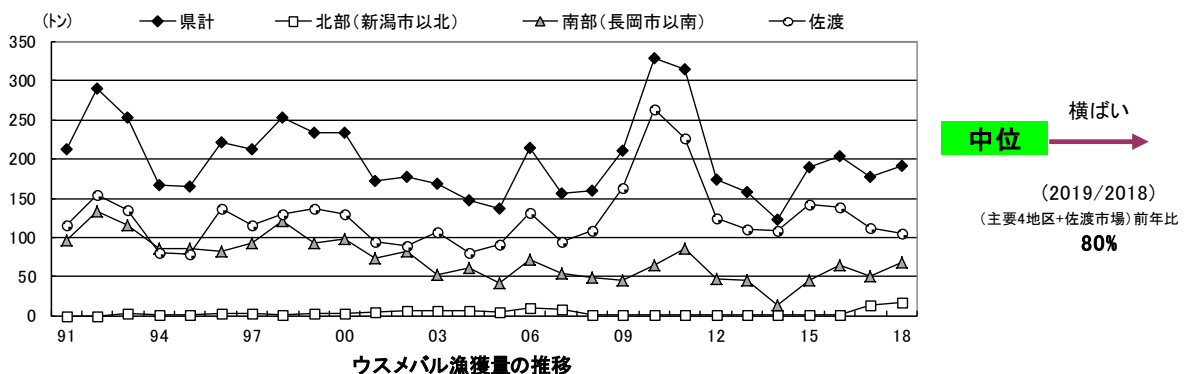
年齢・成長：FLは1歳＝8cm、2歳＝13cm、3歳＝18cm、4歳＝21cm、5歳＝23cm、6歳＝25cm、7歳＝26cm

### 4. 資源状態

- 県全体の漁獲量は2001年以降150～200トン前後で推移していたが、2010～11年は300トンを超えて大きく増加した。この漁獲増は2006年の卓越年級が漁獲の主体であったためで、これ以降、卓越年級の発生は認められず、近年は再び150～200トン前後で推移している。

- 資源水準は中位、動向は横ばい。

- 2019年の上越市場でのモード（FL）は24cm、佐渡市場では27cmであった。



### 5. 資源回復に関するコメント

- 網目2寸2分（6.7cm）以上としていた刺網の自主規制を、平成19年度から水産資源回復計画により、2寸3分（7.0cm）以上に引き上げた。
- 遊漁による釣獲が相当量あるが、正確な釣獲量が把握できないため、資源への影響についての評価が難しい。